

---

# D e l i v e r      届ける者の物語

アセロラ。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Deliver 届ける者の物語

### 【NZコード】

N97271

### 【作者名】

アセロラ。

### 【あらすじ】

手紙を届けるのが仕事だった はずだったけど、ある日突然、  
ポケモンの赤ん坊を届ける事になってしまった。優柔不断で臆病者  
なデリバードのデリルと、勝ち気でちょっとぴりり自己中心的なミミロ  
ップのリタ。これはそんな二人が織りなす愛と感動の冒険の物語  
ではないかもしれない！ 只今更新停止中です。次の更新は来  
年の3月頃になるかと思われますm(— ) m

## プロローグ

「ハア……ハア……」

月が妖しく光り、殆どのポケモンがとうに寝静まっているであろうそんな真夜中。暗がりで姿がはつきりと見えないが、1人のポケモンが何かを抱えて息を切らしながら走っているのが伺える。

(このままじゃ捕まる……！)

そのポケモンは追われていた。彼 もしくは彼女 が抱えて  
いる”何か”が原因で。

追っ手の姿はそのポケモンからは見えないため、距離はそれ程近くはない事はわかる。だが長時間ずっと走り続けて体力も限界に近付いていた今、捕まるのも時間の問題だった。

そして、その結論に至つたそのポケモンは、手に抱えていた”何か”を手放す事に決めた。

「たとえ私に何があるとも、あなたは必ず無事でいてくださいね。奴らにあなたを渡す訳にはいきませんから……」

そのポケモンが語りかけている”何か” それは、まだ生まれたたばかりのようなポケモンの赤ん坊だつた。

(どうか、この世界に再び安息をもたらしてください……)

懐から紙とペンを取り出してメッセージを添え、赤ん坊をとある

家の片隅に置くと、そのポケモンの姿は闇夜に溶け込んで見えなくなった。

## プロローグ（後書き）

やつてしまひました、連載一いつ冊。正直なところ、どつちつかずで両方とも連載止めてしまわないかと不安です（汗）何とか……頑張っていきたいですね。

## 第1話・始まりは突然に（前書き）

なんか最近文章力落ちた気がします……昔からこんなだつたかな？

## 第1話・始まりは突然に

ここは、様々なポケモン達が暮らす島、”パストラルアイランド”。年中温暖な気候に属し、農業が盛んな島だ。

この物語は、そこで手紙の配達を仕事としている1人の「デリバード」を主人公として、間もなく始まりを迎えるとしていた。

鳥ポケモン達の巣（さえずり）が、太陽の光が、朝の訪れを合図する。そしてそれがそのまま彼、デリバードの目覚ましとなつている。

「う～、まだ眠いよ……。たまには仕事休んでゆっくり寝ていたいなあ……」

半開きの眼まなこをこすり、ささやかな望みを漏らすデリバード　名前をデリルという。

「とはいえ、そもそもいかないんだよなあ……はあ」

ついついため息が漏れてしまう。この島で配達業を仕事としているデリルだが、彼が所属する郵便局は、正直なところ人手不足が否めないでいた。そのため、ほぼ年中無休で1日中仕事をする羽目になっているのだ。

「顔洗つてこようかな……」

襲いかかる睡魔を少しでもやわらげようと、近くの川に顔を洗いに行こうと考え、家の外に出ると自分の家の横で、まだ生まれたばかりのよつて思えるアチャモがぐっすりと眠っていた。

「あ、赤ちゃん！？」

田の前のやや現実離れした光景に、驚きを隠せないデリル。

赤ん坊は勿論の事、そこに添えられた手紙が気になつて手に取つてみる。そこには、こう書かれていた。

”突然の事で申し訳ありませんが、この子をミステイアイランドにある博物館まで届けて欲しいのです。道中で色々危険な事に巻き込まれるかもしれません、頑張ってこの子を守り通してください。よろしくお願ひします。”

「……顔洗つてこようかな」

あまりに唐突すぎて、この状況についていけないデリル。まだ夢を見ているのではないかと、そんな錯覚に陥つていた。

近くの川に顔を洗つて、さつぱりしたところで再び自宅に戻るがやはりアチャモも手紙もそこにあった。まだ信じきれないデリルは、自分の頬を思いつきりつねつた。

「痛たたたたた！」

痛い。この痛みは紛れもなく現実のもの。最早言い逃れのしようがない。

「う～、痛いよぉ……」

自分でやつておいてなんだが、やはりやらなければよかつたと後悔するテリル。

現実だとわかつた以上、いつまでも田を離くわけにもいかない。もつ一度、あの手紙の内容を田で辿つていぐ。

要するに、郵便物の代わりに赤ん坊をミスティアイランドにある博物館、トワイライト博物館まで届けるといつ事だ。

「はあ……ミスティアイランドかあ……遠いんだよなあ、あやー」

再びため息が漏れる。ミスティアイランドはここ、パストラルアイランドからは、かなり遠くにあり、船で何度も島々を経由しないといけない所なのだ。

仕事としてはかなりの重労働となるが、文中の内容から、この赤ん坊は何か相当重要な役割を担つて(になつて)いるのではないかと伺えるため、放つておくわけにもいかないのだが　ある一文が、デリルの不安を煽つっていた(あおつていた)。

道中に色々危険な事に巻き込まれるかもしれません、頑張つてこの子を守り通してください。

「き、危険な事つて何なの……」

実は彼、人一倍の臆病者であり、昔から危ないと思つた事には、

異常なまでのアレルギー反応を示すのだ。そつ、まるでジャングルジムから落ちる事が怖くて登る事が出来ない子供のよつ。<sup>。パンツのみ</sup>

兎にも角にも、ここのまま赤ん坊を放つておくわけにもいきまじ。

困った時は人生の先輩に相談しに行くのが筋であろうと考へたデリルは、赤ん坊のためにミルクを用意し、背中に赤ん坊を抱いて郵便局に向かう事にした。

「ガキをミスティアイラングまで届けるだあ？」

郵便局で手紙の仕分けをしながら、バンギラスが呆れた口調で返す。

「あ、はい。僕の家の横にその赤ちゃんがいたんですね　こんな手紙と一緒に」

言ひや否や、懐から手紙を出してバンギラスに手渡す。バンギラスは作業の手を止める事はなく、手紙を片手で持ち、両手で内容を巡つていく。

「…………なんだこりゃ？　バカじやねえの？」

そしてこの一言で一蹴する。デリルも薄々ながらそつ思つていたのだが、それで済ませられるほど、彼の性格はそつぱりとしたものではなかつた。

「そ、そんな事言わないでくださいよ……。僕、どうしたらいいか

わからなくて

……」

「放つておけないなら、お前が届ける。デリバードって種族は、その名の通り、何かを届けるのが仕事のポケモンだろ?」

「それはそうですけど、カイリューさんみたいな速く飛べるポケモンの方が適任かと……」

「あいつはあいつで仕事が山積みだから無理だ。お前の替え玉ならその辺から連れてこれる」

「……！」

確かにそうかもしない。実際、僕がしているのは、この島内の郵便物を届けるだけの小さな仕事。バンギラスさんの言うとおり、僕がいなくても他から誰か別のポケモンを連れてくれば済む話だ。

現実を突き付けられ、うなだれるデリルの肩を、バンギラスが優しくポンと叩く。

「ま、それでもお前はこの仕事が好きなんだろ?」

バンギラスの問いに、こくりと頷くデリル。暖かい手の温もりと同様に、口調も先程までの冷たいものでなく、どこか優しさを感じるものだつたため、少し嬉しくなる。

「お前の所にそのガキが託されたのは偶然かもしれない。だが、少なくとも誰かがお前の助けを必要としてるのは確かだ。仮に他の奴がそのガキを届けるのに失敗しても、お前はそれで平氣なのか?」

そんなわけない と、デリルは首を横に振る。

「……なら、お前が届けてやれ。きっとその方がそのガキも喜ぶだろ」

「……はい！ 僕、必ずこの子をひやんと届けてみせますー！」

最後に一礼すると、一田散にデリルは駆けだしていった。それを見届け、デリルの姿が見えなくなつたところでバンギラスは呟く。

「あいつの替え玉、どうするか……」

家に戻り旅立ちの支度を済ませ、揺るぎない決意を胸に、まもなく旅立とうと決めた刹那。

「デリル、おつはよーっ

「うわあっー？」

突如現れたミリロップの、攻撃とも取れる勢いの抱きつきを正面から受け止めるデリルだが、赤ん坊に怪我をさせるわけにはいかないと何とか踏みとどまつた。

「もお……危ないじゃないか、リタ」

「なによー、私の愛が受け取れないっていうの？」

「そ、そういうわけじゃ……って、愛つて何のことー？」

「私から『コルへの愛に決まつてゐるじゃない」

つられたえるデリルに対し、あつさりと告白をしたリタ。だが、デリルが背中に抱いていたものの存在に気付くと、リタの表情がみるみる怒りのものに変わっていく。それを察したデリルの表情もま

た、うろたえたものに変わつていた。

「リ、リタ……？」

「デリルの……バカー……」

「げふつ！？」

田に涙を浮かべながら、怒りに身を任せて思いつきつ平手打ちを放つリタ。

「ちよつ、リタ、やめつ、落ち着……痛つ！？」

「誰なのよその子！ 私というものがありながり……許さない……！」

「『』、誤解だつて……いだつ、僕の話を聞いて」

「問答無用！」

「や、やめつ……つわああああつ！？」

結局、デリルは30分もの時間をして誤解を解いたものの、リタの平手打ちでデリルの顔は腫れに腫れ上がつていた。

「ふーん……その子、別に『デリルの子つてわけじゃなかつたんだ』  
「さつきからそう言つてたのに……」

いくらか顔の腫れは引いたものの、まだ見るからに痛々しい頬をさすりながら、涙声で返すデリル。

「で、デリルはこれからその子を連れてミスティアイランドまで行くの？」  
「ただけど？」  
「一人で？」

「うん」

「 なんで私を誘わないのよつー！」

再び平手打ち。スパンと綺麗なまでにその音は響き渡る。叩いた本人は爽快かもしれないが、叩かれたデリルからすればその真逆である。

「痛たた……だつて、リタにもしもの事があつたら、僕……」

「デリル……」

「それに、危険な旅になるつてあの手紙に 」

そこで彼はハツとする。勢いでこの子を届けると決めたのだが、彼の本能は危険から回避する事を第一とするものだ。

「じijiijiijishyōf……。島の外なんて僕、出たことないのに……」

「男ならしゃきっとしなさいー！」

「は、はー」

急に不安になつてうろたえるデリルを見るや、リタは一喝する。

「まったく……やつぱりデリルには、私がついてないとダメね。決めた、私もデリルについて行く！」

「え？ サっきのは……？」

「デリルが私を必要としてない事にイラッとしただけかな？」

「…………自己中」

「何か言つた？」

「い、いえっ！」

旅は危険かもしれない。でも、もっと危険なものは、本当にすぐ近くにあるものだ それが、旅立つ前にデリルが学んだ事。あら

ゆる意味でこれから旅が不安になるトリルなのだった。

## 第1話・始まりは突然に（後書き）

今回、主人公とヒロイン（？）が登場しました。

デリル：は、はじめまして、デリルです……。

リタ：リタです、よろしくねつ

この二人、実はとあるゲームにモデルがいます（笑）  
わかつた方は感想欄にて「コメントをw（しなくていい

## 第2話・旅立ちの前に（前書き）

今日は繫がりの話です。

文字数少ないし、話は全く進みません

## 第2話・旅立ちの前に

ひょんな事から、アチャモの赤ん坊を届ける事になってしまったデリル。自称”デリルのお嫁さん”の勝ち気少女リタと共に、前途多難な旅が間もなく始まるとしていた が、その前に。

「デリル、ちょっと私の家に寄つてもいい？」

「いいけど、何で？」

「女の子は色々と大変なの…」

「わ、わかったよ……」

（女の子って、こういう時に面倒なんだよなあ……）

表には出さなかつたが、心中でため息をつきながら、デリルはリタについて行つた。

「えつと、これは怪我した時のための”オレンの実”でー、それからこつちはー」

旅のための支度なのだろう、とデリルは理解した。ちゃんと効能を口に出して確認する辺り、リタにも意外とマメな一面があるんだな、と感心したのだが 。

「そ、そんなに持つてくの……？」

破れるのではないかと不安を煽る（あおる）状態のリュックサックを見て戸惑うデリル。無論、自分も長旅になるだろうと考えてい

たので、多少の荷物は肩にかけているバッグの中に入れてきてはいるのだが……。

「当たり前でしょー？ 私もデリルも、それほど戦いは得意じゃないんだから、道具は万全に用意しないと」

「そ、そうだね……」

言葉では頷いたものの、先程の平手打ちのラッシュショーグビンタ”を思い出し、内心では「リタより強い人なんていない気がする……」と思わずにはいられないデリルなのだつた。

「 よしつ！ 完璧 」

「どこがだよお……」

それから約30分後、ようやくリタは荷物の整理を終えた。厳密には、5分後に一度終わっているのだが、後先考えずに荷物を詰め込んだため、当然のことく持ち運べないという事態に陥ってしまったのである。

その後、デリル自身も荷物の厳選に専念したのだが、リタは何を言つても首を横に振るばかりで作業が難航した結果、30分という時間を要したのだった。

「じゃ、そろそろ行こっか？」

一区切りして準備も済んだところで、デリルはリタに声をかけた。

「あ、ちょっと待つて」

「まだ何があるの?」

「お祈り。すぐ終わるから外で待つてよ」

「……わかった、じゃあ家の前にいるから」

それは誰への?と問いたくなるが、何か触れてはいけない事のような気がしたので、素直に従う事にした。

お父さん、お母さん、私は元気によつてゐるよ。だから、安心して。これから、色々大変な事もあるかもしれないけど、私、頑張るから。

今はこの場にいない父と母に、リタは祈りを捧げる。3年前のあの日から、いつもやつてきたよ。

「じゃ、私も行くな!」

いつもより明るく振る舞い、リタは身を翻して、自分を待っているデリルの元へ向かった。

「デリル、お待たせつ」

「お帰り、リタ」

「さ、行こつ?」

「あ、その前に……」

そう言いながら、デリルは背中に抱いたアチャモを指し示す。

「この子の本当の名前って、わかんないよね……だからこそ、博物館に届けるまでの間、僕らでこの子に名前をつけない？」

「あ、それいい！ 私たちの結婚生活のための予行演習の一環だね

」

「け、けつ」………？

本音なのか冗談なのかわからぬリタの発言にうつむいたえるデリル。

「なに動搖してるのね～。デリルってば可愛いんだから それより、この子の名前、どうしようか？」

「うーん……」

「チャモ？」

決めあぐねたデリルは、背中に抱いたアチャモの顔を見つめてみる。すると、ある一つのフレーズが浮かび上がった。

「アカネ……アカネはどうかな？」

「あ、いいかも じゃ、これからようしきくね、アカネ」

「アチャモ」

なんとなくでつけた名だが、アチャモ アカネは喜んでくれたよう安心するデリル。

「よーし、じゃあ今度こそおしゃべりーーー！」

「チャモー！」

「お、おーーー！」

ソウシテ、ようやく長い旅路の第一歩を歩み始めるデリル達一行。

だが、彼らは知らない。この旅がどれほどの意味を為すものなのか、  
そして彼らに降りかかる厄災の数々を。

## 第2話・旅立ちの前に（後書き）

自分で書いてて思つ」と  
「リタひづせえ　～～」

リタはいつも可愛らしいキャラのつもりで書いてるので暖かい田で見守つてあげてください

そして自分のネーミングセンスのなさに泣いた(、・・・)

### 第3話・ヒロイン最強説（前書き）

久しぶりの更新です。そして文字数少なめ、文章雑という散々な出来ですw

まあ、「Deliver」はおまけみたいなものなのでこんな扱いです

デリル：……（泣）

### 第3話・ヒロイン最強説

準備は全て済んだ。万全の状態でテリルとリタは旅立ちを迎える事となつた。

「えつと……まずは港から船でリゾートアイランドに向かうんだね」「ここから港まで、どれくらいかかるの？」

「多分、歩いて2時間くらいかな？」

「に～じ～か～ん～？」

デリルの返答を聞くと、リタは激しく嫌そうな表情をする。嫌になるのはこちらだとは思つても言えないデリル。

「し、仕方ないじゃない……リタは僕と違つて空を飛べるわけでもないし……」「じゃあ……おぶつて」

「そ、そんなの無理に決まってるでしょー！？」

デリルは既に、背中にアチャモのアカネをおぶつている。リタはそれを分かつて言つているのだろうか。

結局、嫌々ながらにリタも自分で歩くことに決め、二人は港まで徒歩で向かうこととなつた。

一時間ほど経過したところでリタに少し疲れが見えたので、道端

「そろそろ休憩しようか？」「ふう……そうだね

で休憩をとる事にした一行。デリルは肩から提げている鞄からリンゴと果物ナイフを取り出し、リンゴを器用な手つきでウサギの形に切っていく。

「うわあ～、デリルって器用なんだねえ」

「べ、別に大した事ないよ……」

「そんな事ないよ！ 私こんなに綺麗なの初めてみたもん！」

「そ、そうかな……？」

リタのベた褒めに、デリルはつい顔を赤くしてしまつ。

「そうだよ ね、早く食べよ？」

「あ、うん。ほら、アカネも食べな？」

「チャモツ」

デリルがリンゴを近付けると、アカネは嬉しそうにリンゴを食べる。それにならつてリタとデリルもリンゴを口に含む。

「……美味しい！」

「チャモチャー！」

二人とも喜んでくれてるなあ……と、美味しそうにリンゴを食べているリタとアカネを見て微笑むデリル。

休憩が済み、体力も万全に回復したところで、再び歩み出す一行。だが突如、そんな彼らの行く手を阻む者が現れる。

「待ちな、お嬢ちゃん達。持つてゐる金田の物を全部出しな」  
「つ！　と……盗賊……！？」

『デリル達の目の前に現れたニコーラとグライガー、そしてストライク　彼らは俗に言つ盗賊だ。この辺りを行き交つ旅人や村人が金目の物を奪われてゐる事件が多発してゐるという噂を『デリルは聞いた事があつた。おそらく彼らがその盗賊なのだろう。

(ど、どうしよう……)

「はつ！　誰があんた達みたいな小者相手に！」

オロオロする『デリル』とは対照的に、かなり強気な態度を見せるリタ。子供にバカにされたとあって、盗賊達は怒りで体が震えている。

「！」のガキ！　調子に乗つてんじやねえぞ！』

リタの一言にキレたニコーラがリタに向かつて切りかかる。が、リタはそれをいとも簡単にかわし、大きく跳ね上がり上空から”スピードスター”で攻撃した。

「ぐつ！？」

予想外の動きを見せたりタの”スピードスター”を避ける事が出来ず、ニコーラはその威力に倒れ伏した。

「甘い甘い」  
「ニコーラ！？　クソッ……この女！」

倒れた仲間の姿を見て、グライガーとストライクが驚きながらも、

空中で無防備な状態のリタに狙いを定める。

「”ヘドロばくだん”！」

「”かまいたち”！」

グライガーが”ヘドロばくだん”で、そしてストライクが”かまいたち”で、身動きの取れないリタを攻撃した。

「リタ！！」

「大丈夫だよデリル、この程度なら……”みずのはどう”…」

リタは手から”みずのはどう”を放ち、“ヘドロばくだん”と”かまいたち”にぶつけて相殺させた。

「なつ……ー？」

「隙だらけだよっ！ ”きあいパンチ”！」

着地した刹那、リタは瞬時にグライガーの懷に潜り込み、“きあいパンチ”を直撃させた。

「うつ……ぐ……！」

”きあいパンチ”を受けたグライガーは、その威力にひとたまりもなく倒れた。

「グライガー！ ……くそつー！」

リタの実力にかなわないと思ったのか、ストライクは背を向けて退却しようとする。が、リタはその行く手を阻み、みすみす逃がしはしない。

「仲間ほつたらかして一人で助かるひつていうの？ サイテーだね  
！ ”スカイアッパー”！」  
「がはつ！」

ストライクは”スカイアッパー”をくらい、木に頭をぶつけ気を失つた。なんと、リタ一人で盜賊三人をあつさりと倒してしまつたのだ。

「よしつ、一丁あがり！」

「あは、あははは……強いんだね、リタ……」

リタが戦うところは初めて見たが、これほどとは  
かずにはいられなかつた。  
デリルは驚

「チャモ？」

「…………僕は戦わないのかつて？ はは……あんなの僕には無理だよ

……  
「チャ——」

もしリタを怒らせたらどうなるか 想像しただけでぞつとする。

今回の一件で、彼女が更に恐ろしくなるデリルなのだった。

### 第3話・ヒロイン最強説（後書き）

デリル君出番なし　ｗｗ

デリル・僕にはあんなの無理ですよ……（汗）

しかし、戦うヒロインというのはいいものですねえ。リタは別として　ｗｗ

リタ・それ、どういう意味？（怒）

…………そりがねー！

リタ・あ、こら逃げるなつ！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9727i/>

---

Deliver 届ける者の物語

2010年11月22日21時24分発行